

博士論文（要約）

1864年～1910年のソウルにおける
建築活動と都市変化に関する歴史的研究
－復古と西洋化の狭間で

徐 東千

1. 本研究の流れと観点

本研究は1864年～1910年のソウルの建築と都市を、どのような観点から見つめるべきかという問題意識に関して、それをどのように解き明かし、どのような答えを用意するかという一連の過程を示したものである。それは単純に事実を明確に伝え、当時の建築と都市の状況を正確に具現することに止まらず、変化する都市と建築を当時の人々の視線を通して把握するなど、既存の研究にはなかった建築に対する観点から着目したものである。今日の我々が社会について、様々な意見を持ち、様々な判断をしているのと同じような視線が、当時の社会に生きていた人々の中にも存在したはずだ。それを建築史や建築を基に語る都市史という観点から、どのように建築と都市を結び付けながら、一貫して変化の流れを分析するかということに集中した。

その中で、注目したのは、建築を建てるための環境であった。資本や技術をはじめ、建築工事を可能にするため必要な要素は、建築だけではなく、周りの要素に左右される場合が多い。そのため本研究では、建築主の意図・建設業の能力・材料や技術者の普及問題・建築に対する考え方という建築を建てることに繋がる要素に着目し、その建築活動が重なることで、都市も動いていくことを明らかにしながら、その関係性を探ったものである。

第I部では、第一章と第二章にわたり、韓国人がみる西洋式建築と西洋人がみる韓国式建築という二つの観点を基に開港期のソウルの建築を議論した。当時の韓国古来式建築と西洋式建築の特徴を、他者の視線を通して分析し、それを基に西洋式建築と韓国古来式建築における、今まで語れていなかった変数を見つけ出した。

第II部では、本研究の対象時期である1864年から1910年までの、45年間のソウルにおける様々な変化を、第三章から第七章までにかけて調べてみた。韓国の開港期における最も重要な都市である首都のソウルを通して、韓国の開港期を新しく定義できるかどうかを試みることには意義があり、それが韓国の開港期の一般的な特徴の理解に繋がると思われる。都市が持っている全ての与件において、ソウルは韓国の代表性を持つ場所として、その特徴を備えていると考えられる。第三章から第六章まで、ソウルの建築と都市の変化に焦点をあてて、時期別に変化の様相を考察し、その変化に作用する多様な要素を明らかにした。これを、第七章で総合的に当時のソウルの方向性について考察し、建築と都市の関連性について語った。

各章別の内容と章別の関係に関しては次の図で、説明する。



研究の構成図

2. 本研究の評価

既往の研究の中で、韓国の開港期の建築と都市について議論する時、共通しているのは、西洋化と近代化を開港期の最も重要な特徴として論じている点である。この時期の特徴として近代化を挙げることは、そして近代化が一定程度西洋化に一致することについては同意するが、それを全面的かつ無批判に受け入れることは、再考する必要がある。

第一、西洋化の傾向を強調するあまり、他の傾向を見逃している点が挙げられる。韓国の建築における西洋化は、極めて制限的である点から、西洋化を再考する必要がある。韓国に西洋式建築が流入したのは遅い時期であり、直接的な経路を経て流入した建築、すなわち専門的な建設技術者が建てた建築はほとんど無かった。韓国において、専門的な西洋式建築の建築技術者が活動し始めるのは、サバチン等の2～3人の西洋人技術者を除くと、日露戦争以後韓国に大手の日本人建設会社が進出した後のことで、1904年以後になってようやく韓国における西洋式建築活動が本格化したと思われる。その意味で、開港期を西洋化と同一視できるかについて再考する必要がある。

第二、韓国古来式建築をどう見るべきかに関する点が考えられる。開港期の西洋式建築は極僅かだったので、当時のソウルにおける建築活動は専ら韓国古来式建築を建てる行為だったと思われる。1864年から1873年の大院君の執権期における、大規模の建築活動を通して、ソウルの建築と都市に復古が起こり、その復古の影響が開港以後の建築にも持続的に影響を与えたと判断される。

韓国古来式建築が大勢を占めており、まだ西洋式建築が定着していなかった時期において、開港の影響で新しく流入する建築の要素を我々がどのように評価すべきか、それに答えるための考察が本研究に載せられている。開港期に新しく流入する要素として、西洋以外にも中国と日本の要素があった。本研究は、そうした開港期の建築における中国と日本の要素の関係性を探り、それを通して復古と西洋化の間に存在する中国と日本による建築と都市の影響関係を明らかにするための、第一歩である。

本研究を通して明らかになった変化の要因と様相は、次の3. から6. のように整理できる。

3. 建築の構造・材料・装飾における変化

開港以後、西洋の文物と制度が入り、それまでに無かった新しい施設が出来た。外交公館・病院・教会・学校・工場・この制度を運営する官庁等が生まれる。しかし、西洋式建築が流入

する前で、新しい施設が建築の変化として現れることは無く、既存の韓国古来式建築を活用するようになる。既存の韓国古来式建築に西洋式装飾やガラスの窓戸を加え、構造を変更すること無しに使用した。

1890年以後、西洋式建築が建てられるようになり、その数も増えていく。しかしこの時期の西洋式建築は、完璧な西洋式とは言えず、西洋式要素が加わった建築が多かった。躯体は煉瓦にして屋根は古式瓦を使用したり、日本の擬洋風に類似した木造の西洋風建築が建てられたりしたが、ソウルで西洋式建築を建てるためには、材料と技術における限界があり、それを補完する際に生じた建築類型だと判断される。このような建築は中国と日本の影響を受けて起こった変化とも言える。

外交公館や教会を中心に完成度の高い西洋式建築が建設され、1905年以後になると度支部建築所が主導して西洋式建築の数が急増した。以上のように、西洋式建築を建設できるほどの能力を備えるまで、開港期ソウルの建築は、中国と日本の影響を受け、構造・材料・装飾における変化が起こったことが確認できる。

4. 建築技術者における変化

高宗初期の大規模の建設活動を通して、韓国古来式の建築技術が上がるようになったとはいえ、ソウルの建築技術者の数は絶対的に少なかった。したがって、開港以後、西洋式建築技術を受容し適用するほどの力量を備えられなかったと考えられ、煉瓦や西洋式瓦のような西洋式建築に要する材料が不足し、西洋式建築の技術を取得し発展することに至るには無理な状況だったと考えられる。

このような状況の中、西洋式建築活動における重要な役割を果たしたのが、日本人と中国人の建設組織だった。開港初期のソウルの西洋式建築に関する需要は、中国人技術者の役割が重要で、設計と監督は西洋人が担当し、施工は中国人が担当する形態の建設活動が多かった。日露戦争以後、日本人建設会社がソウルに進出するとともに、日本人がソウルの西洋式建築を担当するようになる。この時期における日本人の建設活動は、度支部建築所の支えがあり、官営工事のほとんどを請負うようになった。

中国人建設組織は、西洋人と高宗が建築主として参加する形で、建築活動の幅を広げた。反面、日本人建設組織はほぼ日本人発注の工事だけに留まり、日本人と日本人主導の官庁が発注する量が急増すると共に、その活動も急増し、1910年にはソウルの西洋式建築のほとんどを請負うようになる。

5. 雑居地ソウルにおける外国人領域の変化

1884年からソウルは、雑居地という特殊な形の外国人居留地として開棧し、決められた領域無しに、外国人と内国人と一緒に住むようになる。中国人はその人口と領域が急激に拡張し、日清戦争が起こる以前には、人口が3000人まで成長し、ソウルの至る所に中国人の領域が形成された。水標橋・貞洞・南大門路・東大門路の商業の重要な場所が、中国人の領域になり、点的に拡張したことが分かる。反面、雑居初期の日本人は中国人との商圈争いに負けて、その人口と領域に拡張はあったものの、成長は著しくなく、日本公使館の周りの小さい地域に留まっていた。

しかし、日清戦争後、その状況が一変し、日本人領域が次代に拡張し、ソウルの南部はほとんどが日本人の領域になった。日本人の人口が急増し、1910年になると、35000人に達するほど、人口と領域における急成長が確認される。

6. 建築と都市の復古・中国化・日本化・西洋化

1864年～1910年のソウルには様々な変化があり、その変化は前述のように西洋化だけではなかった。それはまた、復古と西洋化の対立といつ視点で論議しても説明しきれぬものではなく、事実として中国と日本の勢力の活動が活潑だったことから、本研究では中国化と日本化を加えた上で、ソウルの建築と都市における様々な変化を分析した。

当時の人々は、中国や日本の影響によって変化することも、西洋化の一種として認識しており、特に日本の勢力に韓国が左右されるようになると、日本を通して習得した西洋式も、西洋と同じく扱ったのである。ここで、本研究ではそれを日本化や中国化、西洋化という風に見分ける必要が生じ、丁寧に吟味することとした。

具体的には、建築の変化において、中国化は煉瓦の一般化・大衆化に貢献し、西洋化に繋がったと評価できるし、日本化は技術の進化がソウルに現れ、それが西洋化へとまた繋がったと評価できる。それは、変化する都市の様相においても同じことがいえ、中国人の点的分布による広がりや、日本人の放射形の拡散とも関係がある。すなわち、中国や日本の影響下に建築と都市の変化がおり、その様相は中国と日本のソウルにおける勢力の推移とも関係があるといえる。結局、開港期ソウルにおける建築と都市の変化の分析において、西洋化とは、日本化や中国化の一片として現れたと考えられる。本研究では西洋化を中国化や日本化とは違うことと認識したことで、開港期に関しての理解が一段あがったと評価できる。

7. 本研究の限界と今後の課題

開港期の韓国の建築と都市を研究する研究者たちが、共通して抱えている限界は、資料と遺物の不足である。開港以後、記録の観点と作成方法が次代に近代化すると、資料の量と質が向上し、植民地期を対象にした研究では多様な資料を活用して研究できるほどの資料基盤がある。しかし、それ以前の開港初期に関する記録はほとんどなく、あるとしても建築の研究に役に立つ記録は少ない。そのため、開港期の建築の研究はその信頼性において、完全に疑いや疑問をめぐり去ることはできない状態にある。

本研究もその点において限界を持っている。それを補完するため、外国人の個人記録や外国で出版された出版物を確認する作業を行ったが、個人記録が持つ史料としての不正確性という問題は残されており、相変わらず史料の不足に関する問題は未決のままであると考えられる。

しかし、外国人の記録には新しい可能性もある。内部からみると当然視されて記録しなかった部分についても、外部からみると斬新なものとして認識され記録に残すなど、既存の研究では見逃しやすい部分に着目する機会を与えてくれることがありえると思われる。

本研究では、この点において二つの提案が入っている。第一、西洋化ではなく、復古・中国化・日本化をどう見るかに関する事、第二、雑居地ソウルにおける建築と都市の変化の関係はどうなっていたかに関する事、この二つに関する学術的疑問と研究の初期段階における答えを、整理してまとめたものが本研究である。つまり、開港期の建築と都市をみる視線の多様化を試みたと考えられる。

今後の課題として、二つが挙げられると思う。

第一、1864年～1910年のソウルの建築と都市において、実証的作業を続けることが、重要な課題として残されている。当時の建築の情報もまだ空白に残されている部分が多い。建物名・建設時期・位置・建築主・施工者と設計者・構造（材料）・形態（構造と規模）・工事額など、建築の情報が明らかになればなるほど、開港期のソウルの建築と都市を正確に分析する可能性は高くなると期待される。

第二、1864年～1910年のソウルの建築と都市において、さらに新しい観点を見つける必要がある。本研究では復古・中国・日本の影響という大きな流れの要素を見つけ出すことに集中した。その中にはまだ発見されていない様々な建築と都市の動きがあると思われる。それを見つけることで、当時期の建築と都市をみる観点を豊かにできると期待される。

上に挙げた二つの課題は、近代以後の韓国建築史と近代以前の韓国建築史における視点や問題意識の差を埋めることに貢献できると期待される。近代以後の西洋式建築だけに集中している傾向、近代以前の伝統建築だけに集中している傾向、この二つの考え方を繋ぎ、一つの流れの建築史としてまとめることに貢献することが、今後の課題として残されている。